雑誌の性行為記事に描かれた男性像に関する一考察

専修大学文学部ジャーナリズム学科 4 年
木村和美

1. 研究背景と目的

性に関するイメージについて、宮地(2008)は「一般に男性のほうが性的欲求が強く、性的行為においては能動的・主導的な役割を果たすことがイメージされるせいか、男性の攻撃性や、男性のセクシュアリティが攻撃的なものであることに、社会は著しく肝要である」[1]と述べている。また渡辺(2017)[2]は、男性の社会的役割には 5 つの要素があるとし、そのうちの 1 つには女性に対しての優位性が含まれる。この側面にはセックスへの積極性や女性支配志向の強さがあると指摘している。NHK の調査では、男性が性被害に遭った際、「男の人なのに痴漢に遭うんだ」と信じてもらえなかったケース[3]が確認されており、先行研究に見られる男性像は現在の社会においても存在することがうかがえる。一方で、「男らしさの快楽」[4]においては、パートナーとの性行為に対し人とのぬくもりを求めていたり、性風俗サービスに対しては「寂しさ」を感じるといったインタビュー記録を用いて、「男らしさのスタンダードからの逸脱」と指摘し、従来の男性像とは異なる男性たちを紹介している。インタビュー記録の他に、草食男子の登場も踏まえ、「現代においてマッチョな男性像は継承されていないのではないか」とも指摘がなされている。

先行研究に見られるように、社会のイメージと実際の声には差があるが、まずこうした性に関するイメージはどこから得られているのだろうか。この点について、NHK のアンケート調査[5]は、雑誌の影響について指摘している。また、雑誌は、『an・an』の「セックス特集」に見られるように、現在においても性に関する情報を扱っている媒体でもある。

本研究では、雑誌内で性行為における男性の積極性や能動的な姿がどのように描かれてきたのかを雑誌記事を用いて明らかにする。その際、「積極性」「攻撃性」「男性が持つ性行為の意味」の 3 つの観点から記事内容や読者アンケートの回答・解説へ注目、時系列に沿って分析を行う。それにより、雑誌の中で文献[3]が指摘するような男性の変化があるのかについても考察を行う。

2. 研究方法

NHK のアンケート[5]に挙がっていた雑誌の中で、現在も刊行されているものに加え、①性行為の初体験の平均年齢②セックスレスが増える主たる年齢層を踏まえ、20 代 30 代を読者している雑誌を対象とする。以上から、『週刊プレイボーイ』『週刊 SPA!』『MORE』『an・an』を対象とし、Web OYA-bunko で「セックス」「男の性」「性の悩み」とキーワードがつく記事を対象とする。

「積極性」「攻撃性」「男性が持つ性行為の意味」の 3 つの観点を中心に、記事内容へ注目した分析を行う。この 3 つの観点は、先行研究にて男性の性イメージについて「積極性」や「攻撃的」という言及があったこと。インタビュー内で聞かれていたことは、性風俗サービスの利用動機、つまり性風俗サービスを利用する意味であり、パートナーとのセックスとの比較により回答しているケースが見受けられたことの 2 つに依拠している。分析を行う際、上記 3 つの他、「消極性」「該当なし・その他」の 5 つのカテゴリーに分けたのち、アンケートや体験談といった記事スタイルと、悩み相談や性生活の実態調査といった記事の目的に沿って各記事を分類する。アンケートを用いている記事については、その回答や解説に注目し、読者の声が雑誌上でどのように扱われたかについても分析を行う。

3. 研究結果

有効記事件数は『週刊プレイボーイ』が 111 件、『週刊 SPA!』が 65 件、『MORE』が 37 件、『an・an』が 51 件、合計 264 件となった。

4 雑誌の特徴として、『週刊プレイボーイ』は、積極性カテゴリーに分類されるものが多く、性行為の推奨を目的とする記事も多いことが特徴として挙げられる。消極性、特に性行為の未経験をマイナス視が強く、どのように童貞を脱するかを伝える記事が多く見られた。『週刊 SPA!』は『週刊プレイボーイ』とは異なり、消極性カテゴリーに分類される記事が多く、その内容は性生活の実態調査が目立った。これは、未経験やセックスレスへの疑問視をする傾向が高く、読者と同年代もしくは 10 代〜50 代と幅広い年代の性生活の実態を調べるためにアンケート調査を行うためである 2000 年代に入ると、年収や学歴といった社会的地位と性交頻度、経験の有無を関連付ける記事が出現し始める。社会的観点から性行為を捉える内容は『週刊 SPA!』のみにみられたものである。

『MORE』は、「モア・リポート」をはじめ性行為が持つ意味や、回答者の価値観を問う内容のものが多く、性行為が持つ意味を示すセックス観カテゴリーに分類される記事が多くあった。『an・an』も同様に、アンケート記事が多く見られたが、『MORE』と異なる点は、性行為の意味や価値観を問うものと同様に性行為が好きか、どのようなセックスが好きかを問うものも同じように存在した点である。また、男女混合での座談会企画や、女性読者からの悩みに一般男性が答える企画などが存在し、一つの特集内で男女双方の意見を載せる傾向にある。

積極性について、『週刊プレイボーイ』では童貞に、『週刊 SPA!』ではセックスレスといった性行為における消極性に注目し、それをマイナス視することで積極性を期待する表現が多く見受けられた。マイナス視するだけでなく、どのようにその状態を脱却するかといった内容に触れ、性行為を推奨する記事も存在する。性行為をしたい、もしくは興味があるといった表現や、積極性を肯定する表現も見受けられたが、消極性に注目した表現の方が多く存在した。女性誌 2 誌では、アンケート回答や座談会内に見られる「性行為が好き」といった発言により男性誌よりもはっきりと積極性が描かれることが多くあった。また性交時の恋愛感情の有無や、恋人以外との性行為についても触れ、性行為への監視が高い姿から積極性が描かれる表現も存在した。

攻撃性については、男性誌において表れることが少なく、存在した場合は性行為における攻撃性を認める表現が主である。一方女性誌では、避妊意識の低さや性交時の征服感、リードするといった役割意識などによって男性の性行為における攻撃性が明確に描かれている。女性誌にて実施されるアンケートには、性行為が好きかという質問から性行為が持つ意味まで幅広く設問を設けていたため、積極性だけでなく攻撃性が表れる傾向も高い。

性行為が持つ意味については、『週刊プレイボーイ』では大人や男になるといった意味付けがなされ、『週刊 SPA!』ではしっかりと勃起がなされるかといった男性性機能についてや、女性をオーガズムへ導くという役割意識を果たせているかといった能力の確認の機会とされていることが読み取れた。男性誌においては、総じて性行為が自身の魅力の一つとして捉えられていることが多く、その意識はアンケートの他、リード文に表れることもある。女性誌では、身体的快楽に言及しているケースも存在したが、コミュニケーションや愛情表現といったものが多い。こうした意識は、アンケートや座談会内での回答といった男性自身の発言によって表れる。『週刊 SPA!』では一つの特徴として挙げたが、男性性機能に関する言及は 4 誌に共通して見られたものである。

読者回答の扱いについては、男性誌においては性行為をポジティブなものとして伝え、推奨する際に用いられる傾向が高い。女性誌においては、女性読者からの疑問に対し、一般男性からという形で回答に用いられる場合が存在した。総じて、世の男性の総合的な意見や、平均値として扱われ

ることが多い。

4. 考察と結論

積極性、攻撃性、男性が持つ性行為の意味という 3 つの観点と、読者回答の扱いについての分析により、大きく 2 つのことが明らかとなった。一つは、座談会やアンケートに見られる「性行為が好き」という回答や発言、「リードする」などの役割意識によって、性行為に関心が高い姿と共に、積極性や能動性も描かれていくこと。もう一つは、「男になる」「大人になる」という意味付けや、年収、学歴と性交頻度の関連付け、未経験やセックスレスといった性行為に対する消極的な姿への言及により、性行為に対する積極性が期待されていることである。しかし、年代ごとに表現は変化し、描かれる積極性や能動性も異なっていく。以上の分析結果から、雑誌上の性行為における男性像にもある変化が生じることが考えられる。それは、男性と性行為の距離感の変化である。さらに、「20 代と 30 代」という想定読者の年齢の違い、「男性誌と女性誌」という想定読者の性別の違いにより、距離感は大きく 3 つに分かれていく。

はじめに ２０代の性行為については、「男になる」「大人になる」といった意味付けにより性交が推奨されることが多くあったが、2000 年代に入るとそのような記事は減少していく。2010 年代に入ると草食男子が登場し、女性からの男性の消極性への不満、彼女がいればセックスをするが、彼女がいなければセックスもしないという姿が紹介されるようになる。年数を重ねるにつれて男性の性交未経験者から性交に積極的な女性へと記事の視点が移っていき、現在においては男性の消極性にも触れなくなっていく。このことから、20 代の男性は、「男ならする」から「彼女がいるならする」へと性行為との距離感は遠のいていき、積極性を持つことへの期待もなくなっていると考えられる。

30 代については、セックスレスや性欲減少といった、性欲が薄い姿が取り上げられることが多くあった。2000 年代においては、アンケート結果の解説内に積極性を期待する表現は存在したが、セックスレスでも構わないといった読者回答の紹介もされており、性行為を強く推奨する表現が多く存在しているということはなかった。だが、2010 年代に入ると、学歴や年収と関連付ける表現が出現し、性行為との距離感が遠くなっていることを強くマイナス視するようになる。他にも、モテる人の行動パターンと称し同年代で性行為をしている人の行動を紹介し、性行為との距離感が遠い状態をどう脱却するかといった記事内容も存在した。30 代の性行為は年を追うごとに自身の魅力の一つとして捉える意識が強くなっていることが伺える。上記のことから、30 代の男性は、「性欲レス」から「脱負け組」という意識の変化、もう一度性行為を行いたいという心理的な距離感の変化が生じていることが考えられる。

これまでの男性像の変化は、男性誌上におけるものである。女性誌においては、男性誌上に見られたものとはまた異なる男性像が存在する。まず、男性誌において、男性と性行為の距離感が遠のいていったのは、2000 年代、特に 2010 年代においてである。一方で同年代の女性誌においては、アンケート回答における男性の「性行為が好き」という回答率の高さや、男性の積極性に言及した編集部による解説により、性行為に関心があり距離感が遠のいていない男性像が存在する。加えて、リードしたいという役割意識や、身体的快楽を目的とした自分本位な性行為を行う男性像も登場している。女性誌上のアンケートの対象年齢は 20 代~40 代であることが多く、男性誌において性行為との距離感が遠のいている 20 代も含まれており、男性誌上で 2000 年代前後に登場した男性像が、女性誌では現在においても残っていることとなる。加えて、男性の消極性をネガティブに捉える表現も現在にかけて残っており、積極性を期待する表現も見受けられる。以上のことから、女性誌における男性はいつの時代も「性行為が好き」であり、距離感との変化は存在しない。また、男性誌と女性誌における男性と性行為との距離感の違い、消

極性・積極性への言及が女性誌に残っていることから、男性の性行為に対する積極性は男性同士からの視線だけでなく女性からの視線によっても期待されていることが考えられる。

参考文献

1 宮地尚子「男性の性被害：被害と加害の「連鎖」をめぐって」日本トラウマティック・ストレス学会誌 6 号、日本トラウマティックストレス学会、2008 年、p152

2 渡辺寛「多様化する男性役割の構造ー伝統的な男性役割と新しい男性役割を特徴づける 4 領域の提示ー」心理学評論 vol60、心理学評論刊行会、2017 年 p127

3NHK「あなたはひとりじゃない〜性被害に遭った男性たちへ〜」2021/6/24

4 宮台真司・辻泉・岡井崇之「「男らしさ」の快楽　ポピュラー文化からみたその実態」勁草書房、2009 年

5 NHK「日本人の性」プロジェクト「データブック NHK 日本人の性行動・性意識」日本放送出版協会、2002/3/1